

珊瑚
さんご
珊瑚

新田次郎

新田次郎
珊瑚
さんご

新潮社

珊瑚

昭和五十三年十一月十日印刷
昭和五十三年十一月十五日発行

定価九八〇円

著者 新田次郎

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社

182 東京都新宿区矢来町七一 振替 東京四一八〇八
電話 業務部(288)五一二 編集部(288)五四二

印刷 二光印刷株式会社
製本 新宿加藤製本

© Jirô Nitta, 1978, Printed in Japan.

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第一章 三人の梶子

5

第二章 大風

91

第三章 サング後家

169

終章

249

珊瑚の島取材記

261

装帧·辰巳四郎

珊

瑚

珊瑚^{サンゴ}は海底の岩礁に群体となつて固着して生息するサンゴ虫のこ
とをいう。小さい花のような形をした触手で海中の微生物を捕食し
て生きている、腔腸動物に属し、その同族は數百種類に及んでいる。
サンゴには大きく分けて造礁サンゴと深海サンゴがある。造礁サン
ゴはサンゴ虫の骨格ともいふべきカルシウムが岩礁に固着累積して、
いわゆるサンゴ礁を形成するが、深海サンゴは百メートル以深の海
底の岩礁に固着し、この骨格は炭酸カルシウム、炭酸マグネシウム
を主成分としており、密度は約二・七度、硬度は四度であつて、岩
礁サンゴより固く、しかも美しいので、古來、宝石として珍重され
ていた。その形状は樹枝状に似たものが多い。シロサンゴ、モモイ
ロサンゴ、アカイロサンゴ、クロサンゴ等がある。最近はその資源
が涸渇したために高価な宝石として売買されている。

第一章 三人の梶子

五島列島の南西男女群島附近の海はまさに暴風雨圈に入ろうとしていた。明治三十八年八月七日の午後のことである。

金吾の乗ったサンゴ船は大きな波のうねりに乗って軽々と持ち上げられた。金吾は高い丘の上から遠くを眺めるような気持ちで周囲を見廻した。さつきまで、附近にいた数十艘のサンゴ船が十艘ほどに減っていた。波のうねりは高くなつたが、風はそれほど強くはなかった。三角波はまだ立ってはいなかった。しかし空は曇っていたし、生暖い南寄りの風の具合から、何時間とは経たないうちに、暴風雨になるだろうと誰もが予想できるような天気になっていた。サンゴ船は長さ五尋三尺（約十メートル。一尋は約六尺、一・八メートル）ほどの五人ないし六人乗りの帆船であつた。嵐が来たらひとたまりもなく覆没することは分りきっていた。「そろそろ島陰へ避難すじやあないか」

と船主であり同時に船頭である常吉が言つた。とても操業できるような状態ではないと見切りをつけたようだった。常吉ばかりでなく、他の四人の舟夫（ふか）たちも同様にそう思つ

ていた。

船が波の谷底に落ちた。

金吾の目から近くにいたサンゴ船の姿が一度に消えた。やっぱり操業は中止するしかないなと彼は思った。彼の友人の新作と忠治が乗ったサンゴ船はすでにこの漁場を引き揚げていた。だから彼等はこの嵐に会わないで済むだろうやり切れないほどの、無念さが胸中を走つた。このまま男女群島の島陰にかくれて暴風雨の通り過ぎるのを待つとすれば更に三日は経過するだろう。そうなると持つて来た食糧は底を突くから、福江島の富江港へ補給のため帰らねばならなかった。いままで五人で採取したサンゴを総計しても、せいぜい二百匁ほどであつた。収穫量の半分は常吉の取り分になる、あとを四人で分け合うとして彼の取り分はしれたものであつた。

「ようし、綱は引き上げるぞう」

勝五郎が常吉に同調した。五人はそれぞれ手にしていたサンゴ綱の引き綱をいっせいにたぐり上げようとした。

船がふたたび波に持ち上げられた。その瞬間、金吾は綱を握りしめている手に確かなものを感じた。海底のサンゴ綱になにかが引つかつたのだ。手応えとしたら充分過ぎるほど強いものだった。

船はそのまま波の谷間に落ち、また波によって持ち上げられた。綱が張り、前よりも明確な手応えを金吾は感じた。

サンゴ網が海底の固定したものに引っかかった状態で網が引張られたがために、サンゴ網は限界まで延びたようだった。

「サンゴ枝が引っかかったぞ」

金吾は叫んだ。海底のことだから網が岩礁に引っかかったのか、サンゴ樹（サンゴ枝と漁夫等と呼んでいた）にからみついたのか知るよしもなかった。しかし、金吾が叫んだのは、サンゴ枝という言葉であった。ずっと不漁続きだったこのあたりで大物を一つ引き上げたいという金吾の切実な氣持がそのまま言葉になったのだ。

「曾根（礁）の岩にでも引っかかったのだろう」

勝五郎は、口でこそそうは言ったが、金吾のサンゴ網に引っかかったものが大物サンゴであって欲しいという目で、金吾の手許を見詰めていた。

「かせいせんか」

と常吉がどなった。もしか大物がかかっていたらという期待の他に、嵐が迫っているのに愚図愚図してはおられないという心はやりがあったからである。サンゴ船からは五本の綱が海中におろされ、それぞれの綱の先には石の錘を付けたサンゴ網があった。つまり、サンゴ船は石の錘のついた五体のサンゴ網を深さおよそ百メートルの海底に曳きずりながら、動いていることになる。見方を変えれば五個の石の錘のついたサンゴ網はサンゴ船を押し流そうとする

風浪に対しては碇の役目をしていた。

常吉が、五本の綱のうち四本はそのままにして、まず金吾のサンゴ網に全員がかかれと言ったもう一つの理由は、サンゴ船をできるだけ、波浪に対して安定な状態に置いたままで金吾の綱を引き上げようという配慮からであった。

五人が一本の綱にかかるには船はあまりにも狭すぎた。五人のうち金吾を含めて三人が綱に取りついた。

「これはサンゴ枝の大物だ」

と勝五郎が、綱を引きながら言った。勝五郎は、今までに二度ほど大ものを引っかけたことがあった。二度ともシロサンゴだったので高い値では売れなかったが、その時の手応えを覚えていた。

「いいか、声を合わせて、一気に引張るのだ」

勝五郎のかげ声によって、綱は勢いよく引張られた。サンゴ船が綱の方にくるか傾いたがサンゴ網は上っては来なかった。これ以上力を入れるとサンゴ網が破れてしまつて、元も子もなくなる虞れがあった。

「船を少し流すから待て」

と常吉が言った。常吉は舵を取り、他の二人が、船はたに固定してある他の四本のサンゴ網の曳き綱をゆるめた。船は風と波浪によって、いくらか動いたようだった。

「それ引け」

と勝五郎が号令を掛けた。三人は掛け声を掛け合いなが

ら数メートルほど網をたぐり上げたとき、大きな手応えを感じた。同時に彼等は船の中に尻餅をついた。金吾のサンゴ網にかかったなにかは、引く力の方向が変ったことよって、案外簡単に岩礁から離れたようであつた。

三人は声を揃えて、網を引き上げた。サンゴ網にかかったものがサンゴであつてくれたらという願望は全員の色に出ていた。それはやがて、サンゴのうちでも最も高価なモモイロサンゴの大物であつてくれたらという虫のいい欲につながり、いよいよ、それが手近まで来たときには、もはや、間違ひなくそれこそモモイロサンゴの大物だという確信に近いもの變つて行つた。

誰も口をきかずに水面をじつと見詰めていた。

サンゴ網の先が現われた。それは破れていた。おそらくサンゴ網は大きく破れ、石の錘のあたりに残つた僅かばかりの網に何物かが捕えられたのだらうと誰もが想像し、次の瞬間、サンゴ網が破れたからには、ひっかかったものはサンゴではなく別のものではないかという悪い予想に逆転した。サンゴがかかるよりも海底の岩礁の一部を引き上げる場合の方が多かった。サンゴ網のおもりとして付けた石と共に、サンゴ網に海底の岩礁のかげらがついて来たとしたら、これほどばかばかしいことはなかった。

金吾は祈るような思いで肩に力をこめた。最後は息を止めて、水面に現われるのを待った。

深紅の大判型の切り口が海底から姿を現わした。そしてすぐ、二股のアカイロサンゴが根本を上にして、サンゴ網の錘にまたがるような恰好で引き上げられた。アカイロサンゴの大物であつた。岩礁から引き離すときに根本が折れ、そのまま引き上げられたのであつた。

「シャレギの赤（死んだばかりのアカイロサンゴ）だ。三貫匁はあるぞ、どれくらいものを引き上げたものだ」

勝五郎が言つた。アカイロサンゴの売値は百匁三十四だつた。もしそれが実際に三貫匁あつたとすれば九百匁という値がつく。船主であり船頭である常吉が半分の四百五十匁を取り、あとの四百五十匁を四人の舟夫で等分に分けたとしても、一人当りの収入は百十二匁五十銭になる。五人のサンゴ漁師はほとんど同時にその暗算をしていた。

「ぼんやりしていねえで、サンゴ網を全部引き上げろ、愚図ついていると、サンゴ曳きがサンゴのオチギになるぞ」

船頭の常吉が言つた。サンゴはサンゴ虫の骨格である。生きたサンゴはセイキと呼び、サンゴ虫が死んでかなりの年月を経過したものはオチギと呼んでいた。セイキ、シャレギ、オチギのうち、オチギが最も多く採れた。サンゴ採りがサンゴのオチギになるという言葉は、サンゴ船の遭難が多いので自然発生的にサンゴ船の漁夫の口に乗つたもので、それはミイラ採りがミイラになるという言葉と類似した比喩であつた。暗い海底にサンゴの骨とともに自らの骨

をさらすという言葉の裏には皮肉と悲哀がこめられていた。

四人がそれぞれ自分のサンゴ網を引き上げる間に金吾は採れたばかりのサンゴをサンゴ網からはずした。枝が二つに分れていて、枝の先端と先端との距離が一尺五寸、高さが五尺ほどのものだった。彼はこれを筵で包んで船首の甲板の間に入れた。普通の場合だったら胴の間か表の間のだんぶる（船底に取りつけられた蓋のある収容箱）に入れて置くのだが、あまりに見事な大物だったから、甲板の間という特別待遇を与えたのであった。金吾は、このまま真直ぐに福江島の富江港へ帰りたいが、間もなく嵐になることが分つていて、そんな冒険もできなかった。彼はこの嵐がうらめしかった。

「女島へ向って力いっぱい漕げ」

と常吉は言った。

「女島？」

と勝五郎が訊き返したが、常吉はそうだと一言答えたままだった。船は進路を南東に向けた。漕いでも漕いでも、船は期待通りには進まなかった。だが、二時間も一所懸命に漕ぐと男女群島が大きく目の前に迫り、その島々が風を支えているために波浪は穏やかになった。

「男島の東風泊（黒浦）は船でいっぱいだ」

勝五郎は男島を指して言った。狭い入浦に小さい船がひしめき合っている感じだった。

（そうだ、東風泊はサンゴ船でいっぱいだろう。しかし新作と忠治の船はとくに富江へ帰っているから、この嵐に会う心配はない）

金吾はその二人に引き上げたばかりのアカイロサンゴを見せてやりたいと思った。

百艘ほどいたサンゴ船のほとんどは、サンゴの漁場を離れて、男女群島の北側にある男島の東風泊に集っていた。東風泊と呼ばれるように、そこは文字通り、東風を避けるのに好都合な、男島西側の入浦だった。男女群島は北から男島、黒木島、中の島、ハナグリ島、女島の五つの島があり、男島は周囲約十一キロ、女島は周囲約十キロあり、男島の最高標高は二百六十メートル、女島の最高標高は二百八十二メートルあった。両島とも周囲が絶壁にかこまれ、海上から屹立していた。他の三島は周囲一キロほどもないような小島であった。男女群島の近海に出漁中のサンゴ船やその他の漁船が、時化になった場合男島を選ぶのは、女島に比較して男島の方が風を避けるのに好都合な形状をしているからだ。男島は大体菱形をしていて、各角の頂点が岬として延びていた。島の東南面には西風泊、真浦、北風泊があり、島の北西面には南風泊、東風泊があった。この名称で示すように、東風が強いときはその風を避けるために男島の西側にある東風泊に逃げればよいし、西風が強いときには東側の西風泊へ避難すればよいのであって、

男島はそれほどたよりになる、たのもしくも男らしく海上に浮ぶ島であった。

男島に比較して女島は南北に細長い島であった。この島には男島につけられたような名称はなく、島の東側の入浦を前浜と呼び、西側の入浦を後浜と呼んでいた。この島も人が寄りつくことのできないような断崖によって囲まれていたが、東側の前浜には僅かながら上陸できるような浜があった。ここには井戸もあり、小屋もあった。島に上陸するとすれば男島より女島の前浜であった。

常吉が女島へ向って漕げと言ったことは、一時的に風を避けようとするのではなく、島へ上陸避難しようと考えていたからだ。女島の前浜へ着いて、船を陸に引き上げ、暴風雨が去るまで待機しようという腹であった。つまり常吉の長い船乗りの経験から推しはかって、今度の暴風雨はなみたいていのものではないと考えたからだ。それに彼等の場合は、アカイロサンゴの好物を引き上げたのだから、それを大事に守って、富江港へ帰ることをまず考えていたのである。

「女島まではどうやら行けても、二重鼻の岬を廻りこめるかな。この風では無理じゃあないかな」

勝五郎が言った。二重鼻は女島の南端にあった。女島の前浜に上陸して、船を浜に引き上げるには、この二重鼻の先を通るか、又は女島の北の中の瀬戸を通り抜けて男女群

島の東側に出るしかなかった。男女群島の東側に出たら真向から風を受けることになり、いよいよ女島には近づけなくなる。

「無理は分っているが、暮れるまでにはまだまだ時間はたっぷりある。漕いで漕ぎつけられないことはないだろう」常吉は勝五郎の方をふり向いてから、他の三人の方に目をやったが、彼等は櫓を漕ぐのにせいっぱいで、進路のことはもっぱら先輩格の常吉と勝五郎にまかせているようだった。

「それじゃあ、矢張り女島へ行くとしようか。お宝を海の底へお返し申すという手はないからな」

勝五郎も来るべき嵐を自覚していた。嵐に会って、船が覆没した場合のことを、お宝を海の底へ返すと言ったのであった。

五人の気が揃うと船の動きも速くなったように思うけれど、実際は波浪に押し返されて、たいして進んではいなかった。

五人は力を合わせて漕いだ。今すぐにも雨になりそうなしめっぽい南寄りの風だったがまだ雨にはなっていないかった。

船は次第に男女群島に近寄って行った。島陰に入ってしまったと、急に風が静かになり波のうねりも穏かになった。船はしのび寄るように女島に近寄って行った。近づけば

近づくほど風も波も静かになった。目の前に女島北面の断崖が迫っていた。むき出した岩壁は鉄色に錆びて見えた。

女島には一ヶ所だけ男島の名称に似たところがあった。

北西に突き出している東風泊鼻であつた。船が東風泊鼻の先を廻つて、女島の西海岸の後浜に入つたとたんに船は大きく揺れた。突然島陰から外洋に出たような波浪のはげしい抵抗を受けたのである。女島は南寄りの風を支えてはいたが、押し寄せて来る波浪は男女群島の最南端の女島を飲みこもうとしていたのである。更に島の南側へ近づけば波浪の影響が強くなつて来ることは確実だつた。女島の南端から先には島はなかつた。風を支えるものはないのである。「あきらめるにはまだはい」

と常吉が言つた。その言葉は独白のようだつた。常吉の隣りで櫓を押している金吾には聞こえたが他の者の耳には達しないようだつた。

船は後浜に沿うようにして進み、どうやら女島の先端にまで来たがそこから先へは進めなかつた。押しよせて来る波浪を人力で乗り切れることは不可能だつた。船は立往生した。

「ちよつと戻つて、ハナグリ島の瀬戸を抜けて、女島の東側に出て南下し、前浜に漕ぎつけようか」

と、その時、はじめて信吾が口を出した。

「いやハナグリ島の瀬戸は狭いし、あそこは潮の流れも強

く、風も強い。下手をすると浅瀬に乗り上げるか、岩に船をぶつつけることになりかねない。うまく通り抜けて、女島の東側に出て、この風の強さから判断すると、女島の東側はこの倍も強い南風だ。それに逆らつて、前浜まで南下することはまずできないだろう」

勝五郎が言つた。

船頭の常吉は、信吾と勝五郎のやり取りを黙って聞いていたが、その中に割り込むような大きな声で言つた。

「男島の東風泊へ逃ぐつど」

常吉はこのとき初めて逃げるという言葉を使った。それまでは強気だつた常吉が、女島の二重鼻の岬を目の前にして逃げると言つたときに、この船の前途に暗い翳を感じたのは金吾ひとりではなかつた。

船は方向を転じた。船は追い風を受けて、またたく間に女島の東風泊鼻を廻つて女島の北岸に出た。雨が降り出したのはその時だつた。雨が降り出すと同時に風も強くなつた。視界が急に狭くなつた。

船は男女群島の島々を右に見ながら、男島の北西の入浦に近づいた。東風泊には百艘ほどの船が風を避けていた。島に近い部分に、サンゴ船のような小船が集り、その小船を守るように外側に鰐船が並んでいた。

常吉は、それらの鰐船の間をくぐり抜けて内側に入り、そこにひしめき合っているサンゴ船の傍に寄りつこうと一

度は考えたが、思い直して、東風泊では一番南側に当るあたりの鰹船の陰に隠れこむように漕ぎ入った。

男島は南東風に対して屏風の役目を果していた。東風泊に入ると風もたいしたことはなく、波浪もそれほど高くはなかった。

「ここで夜を明かして明日は富江へというわけには行かぬだろうな」

と勝五郎が言った。そんなことは漁師仲間なら誰でも知っていた。うねりの高さや、生暖い湿気を含んだ南寄りの風が次第次第に強まって行く様子から、やがてやって来るものが、ただの嵐ではなく、颶（おおかぜ）（台風は氣象台が使い出したもので、当時このあたりの漁師は台風のことを颶又は大風と呼んでいた）だということは常吉も勝五郎も、そしてまだまだ経験の浅い金吾さえ知っていた。

「大風だとしたら吹き返しが来る……」

と金吾は言った。金吾は福江島の富江へ来てサンゴ船に乗り込んでから五年目であった。その間、毎年のように大風に会っていた。だから、大風が過ぎ去った後に、すごい吹き返しが来ることを知っていた。彼はいま吹いている南東の風は、やがて北西の強風となり、ほんとうに恐しいのは、その吹き返しの方であることをよく知っていた。そうだった場合はこのままここには居られないから、なんとかして島の東側に逃げ込まねばならなかった。今はつらくと

も男島の南側に居たほうがいざというときに楽であった。名船頭と言われている常吉はそのへんのことを考慮して、東風泊の南側に碇をおろしたのであらう。金吾はそう考えていた。

「吹き返しの来るのは明日の朝だ。それも、ただの吹き返しではねえぞ。その前に、しておかねばならぬことは、いまのうちにやっておけ」

と常吉は言った。そのひとことで四人は常吉が、今度の暴風雨はいままでにないような強いものだと考えていることが分った。

「知らせでもあったのか」

勝五郎が訊いた。知らせとは前兆のことだった。

「今日の夜明けだ。お前たちが寝ている間におれは天割れを見た」

「天割れ？」

金吾は思わず口に出した。

「そうだ天割れだ。おれが眼を覚したときには空は薄い雲に覆われていた。その雲が真中から二つに割れて、そこから青空が見えていた。おれの親父は天割れを見たら、真先に逃げることを考えろと俺に教えた」

「その親父さんも、サンゴ船に乗っていて時化を喰って死んだ……」

勝五郎が言った。

「親父はその時アカイロサンゴのしまに取り付いたところだった。面白いように良いのが取れるからつい無理をして逃げ遅れたのだ。親父はこの男島に逃げこまない前にやられたのだ」

「大風にですか」

金吾が訊いた。

「そうだ、その朝天割れを見て、島陰に避難した人の話によると、その大風はひどく足が速い奴だったそうだ」

常吉はしんみりした口調で言ったが、すぐ自分を取り戻そうとするかのように、それまでになく大きな声で舟夫のうちで一番若い、義助に向って、

「まず腹ごしらえだ。こんな天気だからゆっくり飯を炊いて食っているというわけにもゆかない。炭をおこしてかころ餅でも焼くか」

と言った。かころ餅とは甘藷を輪切りにしてふかし、天日に乾かしたものを粉にし、これを餅につきこんだものである。甘味があつて携帯食としては最上のものであった。

常吉がかころ餅で腹ごしらえしようと言ったのは、来るべきものに対する姿勢でもあった。義助は艫（船尾）の間へ行つて、船底に石を並べ、瓦を敷きその上に作った火床で炭火をおこした。

義助がかころ餅を焼いたり、釣つて塩づけにして置いた魚を焼いている間、他の四人はじつとはしていなかった。

彼等は船首から船尾に向つて横たえてある帆柱を波にさらわれないように綱で船に緊縛したり、櫓を同じように船に縛りつけた。一応の取りかたづけが済んだところで、彼等は胴の間に集つて食事をした。義助が焼いたかころ餅と焼き魚が次々とさし出されるのを四人は両手に持つて食べ、義助は片手で餅を焼き、片手でそれ等を食べていた。いつもなら汁があるのだが、汁が欲しいという者は一人もいなかった。水の入った薬罐が火床の上に置かれ、梶が彼等の傍に置かれた。彼等は、食事が終ると湯を飲んだ。いつもの食事ならば、話が出たり笑ひが出たりするのだが、この宵の食事はただあわただしく食べるだけだった。明るさが少しでも残っている間に、嵐に対する備えはすべて終らねばならないという気構えが、彼等の顔にはつきりと浮んでいて、食事が済むと常吉は、胴の間の収容箱に押しこんである綿入れの半天を出して着るように全員に命じた。

綿入れの半天は彼等の寝具でもあった。常吉が綿入れの半天を出して着ろと言ったのは、今夜暴風雨になつた場合、自分の身を護るための、雨具兼防寒具としてこれを着用しろということであつた。

「さあ、船の上に出ているものは、波に流されないように一つ残らず、片付けろ、だんぶるに入れるべきものはささと入れとけ」

常吉が怒鳴った。

船は狭いながらもちゃんと仕切りがあった。その仕切りの狭い一角を間と呼んでいた。舳先の方から、甲板の間、表の間、胴の間、つぎの間、艫の間と続き、艫には舵があった。表の間や、胴の間、艫の間などの船底には造りつけの収容箱があり、蓋がしてあった。大時化の前には、これらの収容箱には蓋がされ、釘づけにされることもあった。それらの収容箱には入れる物が大体きまっていたので、取り片付けはさほど時間がかかることはなかった。「さあだんぶるのふたをするぞ、この中に入れるものはないか」

勝五郎が胴の間で怒鳴っていた。

「ちょっと待て」

常吉は勝五郎を手で制すると、金吾に向って、「甲板の間の奥にしまいこんだサングをこっちへ持って来い。あそこには人が入るから邪魔になる。このだんぶるへ移したほうがいい」

と言った。金吾がそれを持って来ると、常吉は勝五郎の傍にしゃがみ込んで、一度は入れたものをまた外に出して、筵に包んだサングを箱の底に入れ、そのまわりにサング網をおしこんだ。尚、隙間がないように物を入れていっぱいにしてから蓋をして、釘を打った。

「これで大丈夫だ」

常吉は、一人で頷くと、手伝いもせずに覗きこんでいる金吾に、

「その樽に飲み水を入れて縄を掛け、綱でどこかに結びつけて置き、船の上のものがすべて流されても水樽だけは流されないようにして置くのだ」

金吾は返事のかわりに常吉の顔を見た。水がいかに大事なものであるかということと言ったことは分っていたが、さて、ではその水樽を流されないようにするにはどうしたらよいか、うまい思案がすぐには思いつかなかった。彼はまず、艫の船底にある水槽の水を水樽に汲み入れて固く栓をしてから、樽に十字に縄を掛け、それに綱をつけた。水槽の水を樽に移した後の水槽には嚴重な蓋をした。

さて、と金吾はつぶやきながら水樽の置場を考えた。大時化になった場合——船の上を這って歩くことさえ容易でないような大時化になった場合でも、飲み水は必要だった。だからそれは、人間の近くに置くのが一番よいのだが、それを甲板の間に入れるにはそこはあまりにも狭すぎた。

甲板の間には、平常三人が寝て、他の二人は艫のつぎの間に筵をかぶって寝ていた。暴風雨になれば外で寝るわけにはいかないから、窮屈だが、五人は甲板の間に寝ることになる。常吉がサングの置き場所を変えたのも、そういう配慮からであった。水樽をそこへ持ち込むことはできなかった。彼は水樽を甲板の間の近くの船梁の横木に縛りつけたが、